

日本語教員養成課程における教育実習の試み

平 田 歩

1. はじめに

日本語教員養成課程における教育実習はほとんどの場合、実習生が初めて外国人に日本語を教えることを体験する場となっている。平成12年(2000年)に文化庁は「日本語教員としての実践的な教育能力を習得させるために、教育実習が極めて重要であることに留意しなければならない」という提言をした。以来、各日本語教員養成機関では創意工夫しながら日本語教員の質的向上を目指して教育内容の改善を図り、教育実習を必要性の高い科目としてカリキュラムに入れるようになってきた。実習先の確保が難しいという問題などもあったが、姉妹校や国際交流関係にある教育機関で海外実習を行ったり、国内では地域によって「日本語教育実習生受入れ協議会」を発足させ、教員養成を行っている大学と教育実習を受け入れる日本語学校の連携も徐々に行われるようになった。

本学では平成18年(2006年)から夏期休暇中に実施している台湾の国立高雄第一科技大学の学生を対象にした「日本語・日本文化研修プログラム」の中で行う日本語の授業の一部を担当するという方法で教育実習を行った。本稿では2006年と2007年に実施した教育実習についての報告をし、教員養成課程全体からみた実習の位置づけを明確にすべく今後の方向性を探りたい。

2. 「日本語・日本文化研修プログラム」の概要

台湾の国立高雄第一科技大学の学生(以下、研修生)を対象にした本学の「日本語・日本文化研修プログラム」は2006年度から始まった。夏期休暇中の約3週間、お盆の閉館日と校外見学などが無い土日を除いて午前には日本語の授業、午後は日本文化体験などを行い、実習は午前に行う日本語の授業の中で実施した。研修生には本プログラムに申し込む段階で日本語学習歴、4技能(聞く・話す・読む・書く)それぞれについてのレベル申告をしてもらい、それを基に高雄第一科技大学で日本語教育に当たっている現地の教員に実際のレベルを確認した。クラス数が限ら

れているため大雑把な分け方ではあるが、基本的に応用日語系に所属する研修生は学年に関わらず中級クラス、日語系以外の研修生は初級クラスとした。(表①参照)細かい調整は来日後、実際に研修生たちの状況をみて行った。日語系の研修生の場合、高校で第二外国語を日本語としていた者がほとんどであったため、学年の差こそあれ同じクラスにしても授業に支障はなかった。また、2006年度については英語系であっても日本語が中級相当の研修生もいた。このような場合は研修生の日本語レベルに合ったクラスで勉強ができるよう配慮した。

日本語の授業で使用する教材はレベル別に準備をし、各年度とも、初級は『語学留学生のための日本語Ⅰ』〈1課～8課〉(2002年凡人社)、中級は生教材を中心とした内容とし、2006年度の実習生は「目指せ!旅行プランナー」「サイコロを振ってスピーチしよう」「かるたあそび」、2007年度は「日本の遊び」「漫画」「日本の結婚事情」「俳句、川柳」「日本のマナー」「温泉」「昔話」「迷信」「日本一周」などのテーマで授業を行った。

本プログラムの実施期間中は夏休みであるため、学内に日本人学生がほとんどいない状態である。実習のみならず、学生同士が異文化交流できる機会をできるだけ多くつくりたいと考え、日本文化体験の授業は実習の対象ではないが、実習生が学生サポーターとしての役割を果たすべく参加した。内容は年度によって若干異なるが「下関の地理と文化」「市内見学」「日本のまつり」「茶道」「日本料理」「華道」「浴衣の着付け体験」「日本人と和服」「琴、太鼓演奏」「日本文学と映像」「大宰府日帰り旅行」「日本人学生と交流会」「産業観光」「日本の歌」などである。

表① 各年度の実習の概要

	2006年度実習			2007年度実習		
実習期間	2006年8月9日～8月14日			2007年8月8日～8月17日		
研修生	専攻	学年	人数	専攻	学年	人数
	応用日語系	1	1	応用日語系	1	3
		2	7		2	3
		3	4		3	10
	応用英語系 マーケティング	3	8	金融 マスメディア	3	1
		1	1		3	1
応用日語系大学院	1	1				
レベル	初級(8名) 中級(14名)			初級(2名) 中級(16名)		
実習生	●日本語教員養成コース (現代コミュニケーション学科) 4年生(10名)			●日本語教員養成コース (現代コミュニケーション学科) 4年生(9名) ●日本語教員養成課程 (文学部、国際言語文化学部) 3年生(20名)		
実習形態	一人50分 教壇実習			一人50分 教壇実習		

3. 実習に備えて

日本語教育実習は「日本語教員養成コース」の学生は4年次に課し、「日本語教員養成課程」の学生には3・4年次の配当科目である「日本語教育実習」の授業の一部として実施した。今年度はコースが最後の年であり、課程における実習が初めての年であった。いずれにしても、日本語教員養成に関する授業の総まとめという位置づけをし、各自が自分の担当授業に責任を持ち、擬似体験でなく本当に外国人に日本語を教えるということを実践する貴重な機会である。しかし、実習生たちはまだ日本語教員の資格を取得しておらず、教えた経験もなかったため、教えられる側、つまり研修生にとって満足の得られる授業ができるかということが懸念された。これについては高雄第一科技大学で本プログラム担当の方が理解と協力を示してくださった。

2006年度については実習生が少なかったので一人が初中級、どちらのレベルでも授業を行い、2007年度はコースの実習生は中級クラス、課程の実習生は初級クラスを担当することにした。実習についての準備と指導はコースでは「ゼミ」、課程では「日本語教育実習」の授業で行い、どちらも実習をするという目標を掲げ、教授能力の基礎を身につけられるよう指導した。外国人が日本語を学ぶクラスとはどのようなものなのか、その雰囲気はそこへ足を踏み入れなければ感じることはいできない。そこでコースでは3年次に学内で行っている留学生対象の日本語の授業を見学したり、市販されているビデオなどを出来るだけたくさん見て実際の授業がどのようなものであるかを観察した。教材や教具の研究、授業の組み立て方、教案の書き方などを学び、初級を担当する者については実習で使うテキストの到達目標、文法事項の積み上げ方、全体の流れなどを把握し授業の構想を練り、模擬授業に入った。中級を担当する者は生教材のテーマを探し、どのような教室活動を行うかを考えた。また、同じテーマになったり、話題が重ならないよう実習生同士で調整し、教案をもとに一人ずつ模擬授業を行った。模擬授業をするにあたって実習生には事前に教案を提出してもらい、下記の【事前にチェックする点】について確認を行った。これらのことに不備があった場合は模擬授業までに教案を改善し、再度提出を求めた。

【事前にチェックする点】

- ア. 授業の目標が明確であるか
- イ. 時間配分は適当か
- ウ. 学習事項の定着を考えた導入と練習になっているか
- エ. どのような教具を使用するか
- オ. 研修生の反応を考えた教室活動になっているか

次に模擬授業を見ながら以下の点についてチェックした。

【模擬授業中にチェックする点】

- ア. 声の大きさ、スピードは適当か
- イ. 板書や文字カード、フラッシュカードなど提示する文字の大きさは適当か
- ウ. 自然な導入になっているか
- エ. 動機付けはできているか
- オ. 使用する日本語が研修生のレベルにあっているか
- カ. 指示が明確に伝わっているか
- キ. 教師の動き、態度、話し方
- ク. 教材の使い方と工夫
- ケ. 間違いや疑問に対する対処

多くの実習生は実際の授業の様子をうまく想定できず、特に導入部分はほとんどの実習生に改善を求めた。また、教師の動きについても教壇に立っているだけでなく、実際に研修生のそばに近づいて会話をするなど、またとない実習の場なのだから研修生たちとの信頼関係を授業時間内にうまく築けるような工夫をすることが必要だと指導した。多くの実習生が模擬授業の段階で緊張し、教壇に立つとうまく話せなくなったり、声が小さくなったり、学習者のレベルにあった言葉選びが難しく苦勞していた。

また、実習生たちとは台湾について主要都市とその位置、人口、使用言語、気候、日本とのかわりなど事前学習も行った。

4. 実際の授業と反省点

模擬授業での改善点を踏まえ、実習生たちは本番の授業に臨んだ。直前まで可能な限り、よりよく、わかりやすい教具（絵、写真など）を探したり、実習生同士、お互いに授業の見学をしたり、実習の重要性をしっかりと受け止めていた。研修生たちも「実習生」ということを意識せず全ての授業を熱心に受けていた。そして授業が終われば日本語で話をしたり、写真をとったり、食事をしたり交流を深めることができた。多くの実習生は授業だけでなく研修生たちとかかわりを持つ中で様々なことに気付いている。それは、いかに日本語について無知であったかということや、研修生たちの語学力を目の当たりにして自分の語学力について反省するなど、同じ年代の研修生たちに刺激を受けたようである。

実習後に提出させた感想の一部を以下に挙げてみる。

- ・授業をイメージしながら教案を考えましたが、実際の授業では段取りが悪くなってしまった。思ったよりも日本語ができる初級レベルの研修生たちだったが、反応がいいところと悪いところがあり、予想外のことだらけで焦った。
- ・事前の準備はしっかりとしなければならない。また、予想外の質問や反応をみながらの対応、時間配分なども臨機応変に出来なければならない。
- ・いろいろなことを想定して準備を進める必要がある。
- ・語彙説明をするとき、難しい言葉しか思い浮かばず、かえって混乱させてしまった。学生の日本語レベルにあわせ、語彙などの意味を日本語で説明することの難しさを感じた。
- ・自分が用意していた説明では研修生に意味が伝わらず、説明に時間がかかった。
- ・グループワークなどでは母語の私語が多くなってしまった。
- ・緊張して頭が真っ白になった。それでテキストに沿っただけの授業になりつまらなかった。
- ・緊張して何をどうすればいいのか分からなくなり、途中で間が空いてしまった。

意外なことに、実習生たちの感想は教えたクラスのレベルに関係なく同じようなものが多かった。「予想外の展開」「説明の難しさ」「緊張」など、どの感想にもこのようなことが書かれてあった。実際に日本語教員をしている者にとっては「緊張」はともかく、「予想外の展開」「説明の難しさ」などは日常的なことであるため経験を重ねるごとに慣れてしまう。対処の方法などあってないも同然である。実習の指導をする際には、一通り予想できることは問題提起して全員の課題として取り組むが、実習では1人で対処せねばならず、そこで授業の流れが変わってしまい戸惑うことになる。このような場合、実習生には誠意を持って対応するよう指導している。その場で答えられなければ責任をもってきちんと調べ、翌日までには説明できるようにすることが肝要である。今回の実習生もこの点はしっかりとできていた。また、実習をして良かったこととして、実際に外国人に日本語を教える機会が得られたこと、国際交流ができたこと、自分のものの見方が変わったこと、外国人に対する偏見がなくなったことなどがあげられていた。実習生たちにとっては多少の負担はあったかもしれないが、得るものも大きかったのではないかと思う。

これだけの実習で、すぐに教えられる日本語教員として現場に出ることは非常に難しいが、資格を得る以上、実践を経験し日本語教員としての能力と態度をしっかりと身につけることが重要である。

5. 今後の課題

日本語教員の資格は法に基づく免許制度ではなく、教育内容について新しい指針は出されるも

この教員養成課程の在り方については各教育機関に委ねられているというのが現状である。教育実習においても、その方法や指導項目など実践する内容について明確なものはない。このような状況下、求められる日本語教員は国内・海外を問わず「実践能力」が重視されている。実践力のある日本語教員を養成するためには教育実習の充実を図り、質的向上を目指すことが急務であると考えられる。また、実習生の中に外国人留学生がいた場合のことを考える必要もある。同じ国の研修生に教える場合と、そうでない場合が出てくるが非ネイティブ教員に求められることは何か、これも今後の大きな課題である。

《参考文献・資料》

- ・文化庁（2000）『日本語教育のための教員養成について』日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議
- ・中川良雄（2004）『秘伝 日本語教育実習 ～プロの技』凡人社
- ・金久保紀子（2000）「副専攻日本語教員養成コースにおける日本語教育実習のあり方」『東京家政学院筑波女子大学紀要第4集』東京家政学院筑波女子大学
- ・金久保紀子（2001）「第2回日本語教育実習の報告」『東京家政学院筑波女子大学紀要第5集』東京家政学院筑波女子大学
- ・亀田千里・金久保紀子（2003）「日本語教育実習の改善を目指して」『東京家政学院筑波女子大学紀要第7集』東京家政学院筑波女子大学
- ・藤田祐子・佐藤友則（1996）「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか ——PAC分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究——」『日本語教育89号』日本語教育学会
- ・堀口純子（1992）「日本語教育実習指導のための基礎的研究」『日本語教育78号』日本語教育学会
- ・丸山敬介（1990）『経験の浅い日本語教師の問題点の研究』創拓社
- ・岡本輝彦他（2002）『初級 語学留学生のための日本語Ⅰ』凡人社